

平成 31 年度 北海道教育大学札幌校 教員養成課程 特別支援教育専攻
編入学 小論文問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
2. この問題冊子は、2 ページ、解答用紙は 4 枚、下書き用紙は 4 枚あります。
3. 「問 1」、「問 2」全てに回答すること。
4. 解答用紙は、「問 1」、「問 2」とともに 2 枚あります。
5. 解答は解答用紙に横書きとし、句読点および段落の空白も 1 文字とし、指定された文字数内でまとめること。ただし、題・氏名は記入しないこと。
6. 受験番号は、解答用紙の指定欄に記入すること。
7. 解答用紙 4 枚を提出し、問題冊子・下書き用紙は、試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
8. 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて試験監督者に知らせること。

問2. 北海道新聞電子 2018年8月21日の以下の記事（一部抜粋）を読み、問に答えなさい。（125点）

特別支援学校「運動部なし」4割 広い学区、限られる時間 道内の実施率、全国下回る

全国特別支援学校長会の実態調査で、スポーツ系部活動のある特別支援学校が道内では46%と、全国平均の59%を13ポイント下回った。道内の関係者からは通学圏の広さや施設・備品の不足などを指摘する声上がる一方、障害のある子どもたちにスポーツと親しむ場をつくる試みも始まっている。

道教委特別支援教育課によると、道内の特別支援学校は都府県に比べ、広域に分散。時間を掛けてスクールバスで通学している生徒も多く、「部活動に割く時間がとれない生徒もいる」と指摘。また、障害の種類などで学校が細分化されるなど、「障害の程度の重い生徒の通う学校は、スポーツ系部活動の設置が少ない傾向にある」という。

公益財団法人「小野寺真悟障がい者スポーツ振興会」（札幌）の事務局長で、障害者スポーツに詳しい鈴木重男事務局長は、道内が全国平均を下回る理由として、「《1》人口密度が低い《2》学区が広く、自宅が遠くなる《3》障害者スポーツのできる環境が地域にない一点を挙げる。

指導者不足も部活動普及の妨げとなっている。保健体育の免許を持つのは全教員の1割超。外部指導員の導入も進んでいない。（日栄隆使、石田礼）

【問】

特別支援学校の児童生徒がスポーツと親しむ機会を得られにくいことで生じる問題をいくつか挙げ、問題への対応方法について教育的立場から 600 字程度で説明しなさい。

出典：特別支援学校「運動部なし」4割 広い学区、限られる時間 道内の実施率、全国下回る 北海道新聞2018年8月21日
北海道新聞社許諾D1909-2208-00021296

問1. 北海道新聞電子 2018年8月30日の以下の記事を読み、問に答えなさい。(125点)

小中校に看護師配置、医療的ケアが必要な児童受け入れ 江別市が新年度から

江別市は30日、人工呼吸器やたんの吸引などの医療的ケアが必要な子どもに対応するため市立小中学校に3人の看護師を配置すると発表した。新年度から児童を受け入れる。

道教委によると、特別支援学校以外で看護師を配置している道内の小中学校はまだ少なく、8月現在で15市町の27校30人。

これまで市では、医療的ケアが必要な子どもが市立の小中学校に通う場合、保護者の付き添いを条件としていた。保護者の負担は大きく、地域の学校をあきらめて看護師がいる特別支援学校に通うケースもあり、障害のある子どもの親から地元 학교に看護師を配置するよう要望が出ていた。

今後は市内の小中学校からそれぞれ1校ずつ対応校を選び、看護師3人でカバーする計画。年内に受け入れ可能人数など詳細を固める。

国は医療的ケアを必要とする子どもの増加に伴い、公立小中学校に配置する看護師の人件費の3分の1を助成しており、江別市も今後、活用していく。(山本哲朗)

【問】

医療的ケアが必要な児童生徒に対する「多様な学びの場」の設置における課題を、次の語句を用いて600字程度で説明しなさい。

語句：「共生社会」、「障害者の権利」、「基礎的環境整備」、「合理的配慮」

出典：小中校に看護師配置、医療的ケアが必要な児童受け入れ 江別市が新年度から
北海道新聞2018年8月30日 北海道新聞社許諾D1909-2208-00021296